



今回の調査は、中村宿毛高規格道路建設に伴う緊急発掘として実施した。道路幅という限られた範囲の調査であるが、船戸遺跡の中心部分を調査できた。

調査の結果、古代から中世にかけての遺構としては、掘立柱建物や溝を検出した。木簡が出土したのは鎌倉時代の溝で、幅一・五m、深さ一m前後で、二五m分を確認し、中筋川に向かって延びている。この溝からは、木製品や竹製品とともに土器類も多量に出土している。木簡は、埋土下層の暗褐色砂質土層から和泉型の瓦器碗とともに出土している。和泉型の瓦器碗はⅢ期の製品である。

船戸遺跡の性格としては、石製の錨が出土していることや、地形環境・小字などから川舟の停泊地としての集落が考えられる。

#### 8 木簡の釈文・内容

(1)

-

(符籙) (鬼の絵) (符籙)  
〔九  
ミカ〕  
〔急  
ミカ〕  
□□×  
(285) × 60 × 4 051

中央には鬼面が描かれしており、その上には「月」が四文字三段に書かれている。さらに下方には「鬼」の文字が三文字、二文字、一

文字と三段に書かれている。下端部は欠損している部分もあり、墨痕も薄く明確に釈読できないが、「九ミ八十一」と「急ミ如律令」が並んで書かれていたものと考えられる。

(松田直則)

関西大学東西学術研究所

大庭脩 編輯

『漢簡研究国際シンポジウム'92報告書

漢簡研究の現状と展望』

一九九二年一二月に開催された、漢簡研究国際シンポジウム

'92の記録である。一二、一三両日のシンポジウムの他、一四日に中国・台湾の研究者と秦漢史研究会・木簡学会・書学書道史研究会の研究者を集めて行なわれた学術討論会の記録、及び関西大学漢簡研究会における報告（和文四篇、中文八篇）も併載する。

(A5判 和文三一八頁、中文一九八頁 関西大学出版部刊  
定価七〇〇〇円)